



「学生時代は介護の仕事に就くとは思っていませんでした」と話す松岡さん。でも案ずるより産むが易し。実際に勤務し始めたら、仕事のやりがいを実感する日々。「何事もまず挑戦してみる。今後は資格取得にも挑戦したい」と言います。



移住者が応援

伊方町地域おこし協力隊
竹山和宏さん



伊方町の産官学で組織する移住・定住促進協議会は、年5回程度、東京や大阪で開催される移住フェアやセミナーに参加しています。滋賀県出身の竹山さんは、2017年に伊方町地域おこし協力隊として移住。移住・定住促進協議会のメンバーとして活動に取り組み、自らが主導して伊方町の空き家バンクづくりを進めています。「私自身が移住者ですから、移住希望者に寄り添うような活動をしたい」と竹山さん。また地域の人たちに移住者を迎え入れてもらいやすいよう、積極的に地域の方々と交流しています。

住居確保のための制度

町では、空き家・空き地を登録し、不動産会社を介して、所有者と利用希望者のマッチングを行う「空き家バンク制度」を整備。この制度を通じて購入・賃借した一戸建て住宅は、住宅改修、家財道

具搬出費用の2/3を支給します。

こちらにアクセス
<http://www.town.ikata.ehime.jp/akiya>

じもとの仲間と取り組む活動がとにかく楽しい。
 消防団や祭りで結束する
 故郷の空気が大好きです。

「大学卒業後は絶対に伊方町に帰ると決めていました」と話す松岡さん。その理由は、消防団や祭りで結束する故郷の空気が大好きだったから。「大学在学中は松山で一人暮らしをしていましたが、ご近所さんと会話することもなく、寂しさを感じていました。じもとは一歩外に出ると知り合えば

かり。なんだか安心してきますね」。就職活動ではじもとで暮らすことを条件に探し、実家からも近い特別養護老人ホームに就職しました。「不安はありましたが、職場の方はもちろん、利用者さんやそのご家族ともいい関係を築けており、日々やりがいを感じています」。プライベートでは消防団

活動に動かし、秋祭りでは「お車（山車）」をひいて地区を練り歩きます。「じもとの先輩や同級生、後輩とともに取り組む活動がとにかく楽しい。集まってお酒を飲んだり、会話を楽しんだり。毎日がとても充実しています。仕事にもずい分と慣れることができました」と



04
 灯台じもと暮らしの人々
 社会福祉施設勤務
 松岡昭宏さん
 (24歳)